

グレート・コミッション

吉田隆・恵利子宣教師を支える会

第102号 2025年3月15日発行

発行：グレート・コミッション 吉田隆・恵利子宣教師を支える会 郵便振替：00910-3-210061 グレート・コミッション
事務局：〒606-8274 京都市左京区北白川大堂町4-3 京都キリスト福音教会内 FAX 075-791-3488

バングラデシュ

吉田 隆



ウィリアム・ケアリの住居跡地

英国のウィリアム・ケアリは、近代プロテスタント宣教の父と呼ばれています。ケアリはインド宣教をした人物として、知られています。大英帝国全盛の時代に、くつ屋をしながら宣教を志しました。カルカッタ(コルカタ)から、現在はバングラデシュとなっている地にやって来たケアリは、そこに住む人々に伝道をしながら、聖書をベンガル語(バングラデシュの国語)に翻訳した他15の言語に翻訳をしたのです。今回のバングラデシュ訪問では、KBI(関西聖書学院)のアウトリーチ・チームと共に、ウィリアム・ケアリの足跡を訪ねることができました。



バングラデシュ 吉田 隆	1-2
献堂式 + 鍬入れ式報告 吉田 隆	3
神さまは天のお父さん 吉田宣教	4
宣教と霊的な戦い③ 吉田恵利子	5
グレート・コミッションを読んで 中山聖一郎・はとみ	6
感謝とご報告・祈りの課題	6

ケアリの家

私たちをお世話くださったアルバート先生は、7代目のクリスチャンですが、最初にクリスチャンになった6代前のお祖父様は、ウィリアム・ケアリから福音を聞いて信じた方だそうです。

アルバート先生は、私がケアリの遺跡を訪見したいという希望を受け入れてくださり、私たちはケアリが住んでいた家に向かいました。アルバート先生自身、家があったと言われるところの近くまでは行ったことがあるのだそうですが、まさにここがその家の建っていたという場所をご存じありませんでした。

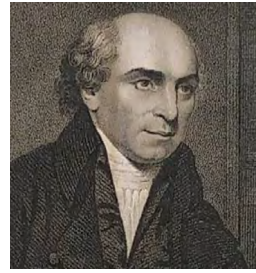
日本では普段ナビを使って目的地に行くことに慣れている私たちは、ドライバーが幹線道路からはずれた田舎道をくるくる曲がって進んでいくのを見て、大変驚きました。わけの分からない田舎道を走ったあげく、車がほとんど通らないような道に来て、私たちが行きたいところはこの辺りの先だろう、と車を止めました。近くにいた自転車に乗っている男性に窓を開けて聞こうとすると、その人が「ついてこい」と手招きで導いてくれました。そして、その導き手は、ケアリの家があった跡地まで連れて行ってくださいました。もう車が入っていけない林の中まで来て車を置き、導き手は自転車を置いて歩いて歩きました。



ケアリの功績

ケアリはベンガル語の聖書翻訳だけではなく、ベンガル語の文法書と辞書を作った功績のある人ですから、バングラデシュの政府はケアリの家を歴史的建造物として保護するべきであったのにもかかわらず、跡形もなく破壊されてしまった状況に、「けしからんことだ!」とアルバート師は憤慨していらっしゃいました。

アルバート師は「今でさえ、開かれていないこの場所に、ケアリ一家はいかにして来ることができたのか、カルカッタから舟で来たと言われているけれども、



御霊の導きであったとしか考えられない。ベンガル人である私たちに、今ここに住みなさいと言われても、だれも住みたくないだろう」とおっしゃっていました。

ウィリアム・ケアリ この村はベンガル語でシャダモホルと呼ばれていますが、それは「白人の家」という意味だそうです。現在も、この村にはキリスト教会がいくつかあり、信仰が守られていました。

さらにこの導き手は、ケアリがここにいた時に病気にかかって死んでしまった二人の息子の墓に案内してくれました。ケアリ一家が、川でお風呂がわりの水浴びをするための家があったところも教えてくれました。ところが、実はこの導き手は話すことができない人物だったのです。全部、ジェスチャーで示してくれました。この林の中で、どこに何があるのか分からないような場所を的確にジェスチャーだけで示してくださったことに感激しました。後から、「あれは主が私たちのために遣わしてくださった御使いだったのではないだろうか?」と話していました。

ケアリの講壇

この家からかなり離れたところに、バプテスト教会があり、こちらも訪問することができました。この敷地には、現在もバプテスト教団の施設がいくつか建てられています。ケアリが説教した講壇と説教台が残っており、現在もこの教会で用いられています。

230年前に、ケアリがインドに来る前は、母国英国の教会から反対されました。インドに来てからは、東インド会社から反対を受けました。大きな犠牲を払って、全く不便な、最悪の環境の中で、現地のことばを習い、理解し、伝えて行っただけで今日のキリスト教会があることを強く感じました。ケアリは次の名言を残しました。「神から大いなることを期待せよ。神のために大いなることを試みよ。」



ウィリアム・ケアリの講壇



新会堂に集まるパトゥバラ村の信徒たち



新会堂外観

献堂式 + 鍬入れ式

2025年2月14日は、非常に感動に満ちた日となりました。2023年3月にバングラデシュを訪問した時に、6つの村々を巡回して、集会を持ちました。それぞれのコミュニティーには救われる魂が起こされ、村によって事情は異なりますが、数百人のクリスチャンが集まっているのです。しかし貧しさのゆえに教会堂がなく、彼らは村の広い空き地に日差しが射す中座ってなければならぬのです。雨季になると空き地は泥だらけになり雨も降るので、いよいよ集会をすることが困難になるのです。こうした村々のために会堂を建設する費用を日本から送ることは出来ないだろうか。チャレンジが始まりました。

雨風に耐えうるしっかりとした一つの会堂を建てるために300万円ほどが必要であると聞きました。50万円捧げてくださった教会、個人の名前を会堂に記して、その教会のメンバーは祈り続けるという一種の契約を結びました。主は思いを越えて働いてくださり、600万円近い献金が捧げられました。

ところが、これをバングラデシュに国際送金する時に壁にぶつかりました。マネーロンダリングなどの問題のために送ることができないのです。次に日本側では円安が進行、バングラデシュ側では鉄材の高騰。こうした困難の中、1年半かかってパトゥバラ村の会堂建設のお金を送ることができ、昨年11月初旬に第一号会堂の建設を開始することができました。会堂建設が決まったこの村の信徒たちも、貧しい中で自分の土地を捧げたり、収穫したお米を献げたりしました。

献堂式のメッセージで私は次のように語りました。「この教会が献堂されたことは大きな喜びです。第一に、それを与えてくださった生ける神に感謝します。第二に、この建築のために労してくださった、また大

きな犠牲を払ってくださった地元の方々に感謝します。第三に、バングラデシュのみなさんを愛して大きな犠牲を払った日本のクリスチャンに感謝します。確かに私たちが信じている神は生きておられ、祈りに応えられる神です。この教会のみなさんが、日本で献金してくださった教会と個人のために、お祈りし続けてくださることは、大きな意味のあることです。すばらしい祝福を主は注いでくださいます。バングラデシュと日本のクリスチャンが祈り合うことは、時空を超えて神の国を前進させることになるのです。」

同日の午後、ダルカマリ村に第二番目の会堂を建設開始するための鍬入れ式に参加しました。ご自分の家の土地を献げてくださった牧師夫人も紹介されました。かなめの柱となるところにコンクリートを流し込むことによって、やがてここに主の会堂が建設されることを感謝し、祈りました。

今回、上記の二つの教会以外に六つの教会を訪問しましたが、その中には屋外で集会をしている教会がいくつもありました。これらのキリストのからだのためにも会堂が備えられるために、献金を送ることができるよう祈ります。



鍬入れ式で柱にセメントを入れる

2023年5月より、私は三菱電機に転職し新たに働きを始めました。

「吉田さん、賞与って何月までいたら支給ですか？」最近、同じ課の別のチームに中途入社してきたAさんはこう尋ねてきました。「12月です。一応念のため確認ときますね。」と私は答えたものの、心配になりました。

「会社、辞めようと思っているんです。」とAさんは言いました。

聞くとAさんは、中途入社で入ってきて、環境に慣れず、仕事量も多く辛かったそうです。話を聞きながら、私も彼の入ってくる1年前に入社して同じ経験をしていたと思い返しました。

前任者から仕事を引き継いだ途端に、複数のトラブルの火消し対応に迫られました。扱っている購入品の影響は億単位で、大きな責任が突きつけられています。しかも、生産ラインを止めると海外も含むサプライチェーンに影響が出るので、常に即対応が求められました。マニュアルも整っていないので、会社特有の事情については聞かないと分からないことが多いです。しかし、周りも一人に与えられている業務量が多すぎて自分自身の手を止めて教えてもらえるような暇が無い状況でした。

そうした環境下でプレッシャーを感じ焦りましたが、私のすぐ上の上司になったチームリーダーのOさんはとても良い人でした。自分自身も忙しい中で出来るだけ時間を作って説明をしてくれましたし、関係者からの追及に対して間に入ってくれました。しかし、Oさんは数ヶ月して、引越越し遠隔地勤務（基本在宅勤務で週1出勤）になりました。そうすると、今までOさんで留められていた追及が私に飛んでくる様になりましたが、人間性を否定する様な言い方で話を詰めてくる人も出てきました。膨大な仕事を抱えてフル残業が続き、流石にしんどいと感じる様になりましたが、隣の課のN先輩が、よくご飯に誘ってくれるようになりました。N先輩と会話する中で、精神的にしんどい状況でしたが、少しずつ会社にも慣れていくことが出来るという希望を持つことが出来ました。おかげで、だんだん仕事に慣れ、少しずつ楽しくなっていました。

そしてさらに数ヶ月が経過したある日、N先

輩の東京への異動が発表されました。とても仲良くさせていただいていたので、驚きでした。しかし、考えてみると、神様は必要なタイミングに助けてくれる人々を与えてくださっていたのです。最初に自分の上司になったOさん、そしてOさんがあまり来ることが出来なくなった頃にN先輩を備えてくださり、私の心が完全に折れないようにしてくださっていたのです。

今も相変わらず仕事量が多いのですが、仕組みの改善を提案したり、より前向きな仕事に関わったりと面白くなってきました。忘年会の幹事や職場のプレゼン大会では、教会でしていることが活かされると感じることも多く、私の個性も出せる様になってきました。仕事の辛さの最中にある時、私は次のみことばを思い起こします。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えられないほどの試練に会わせることはなさいませぬ。……」（コリント10：13）

そして、これまで生きてきた人生を振り返る時、いつも神様が助けてきてくださった事実を確認し、今もこの次も大丈夫だと思います。以前の会社でもそうでした。なので、きっと今回も大丈夫だと思います。私たちの信じる神様は、お父さんなのです。その場所の祝福となるように私たちを遣わします。そこに必要な助けは備えてくださり、最終的に平安と祝福で満たしてくださいます。

感謝なことに、以前の会社の方と今でも仲良くさせて頂いていただいています。

人生というのは、行く先々で家族みたいなコミュニティが出来ていく、その連続なのかもしれないと思います。



前列一番右が筆者

30年前に香港に遣わされた時に起こった靈的な戦いについて、前々回から書かせていただいております。(100号・101号)

高圧電流事件からようやく回復し、香港での生活に慣れるために奮闘する中、最初に迎えた冬、床上から水が湧き上がる事件が起こりました。

タイルばりのアパートの床の目地から、あたかも泉が湧き出るように溢れ出したのです。驚いて大家さんに連絡すると、旧正月休みで、業者さんが中国に帰省中で、全てがストップして直す人がいないので、旧正月明けに戻るまで待つように言われました。

そうこうしているうちに泉は次々と増えていきました。夜中も吹き出す水を取り除く作業で、眠ることができない日が続きました。

旧正月休みが明け、業者さんはドリルで家のタイル・コンクリートの床を掘り起こし、家の中はあたかも道路工事復旧作業の只中のようにでしたが、原因箇所を見つけ出すには全てを掘り起こさなければいけないとのことで、別の措置が提案されました。床下の水道管をカットして新たな方法で直してもらうことができました。

不慣れな外国の地での生活が始まった最初から、このようにして次々と問題が起こりました。

階下の住人からは、「天井から水漏れしているから見に来い！」と言われ、この水漏れの被害の大きさに驚きました。幸い、この件に関しては大家さんが担当してくださるようになり、主が働いていただきました。

前回、切迫早産で入院中に、反日感情に問題のある一人の看護師さんから、主が私を守ってくださったことを記させていただきました。切迫早産から守られ、月満ちて出産の日を迎えました。私の担当の看護師さんが来てくださり、立ち会いが許可されている主人もそばについてくれました。時間が経過し、私の担当の看護師さんから別の看護師さんの交代の時間となりました。すると、あの反日感情の強い看護師さんが現れると、いきなり、何も問題が起こっていなかったのに、陣痛を待っているそばから、無理やり説明もなく主人を追い出しました。病院にも医師からも許可を取っていたにもかかわらずです。その後、恐ろしい時間が続きました。

いよいよ出産が始まることになり、お医者様も来ていただきました。赤ちゃん（三男成就）は無事産まれましたが、泣き声をあげません。仮死状態で生まれたのです。すぐに処置をして別室に連れて行かれました。するとその看護師さんは私に突然、何の説明もなく、注射をしました。意識が無くなってから相当長い時間が経過したようです。目が覚めると別の看護師さんに起こされて、その時鏡に映った自分の顔を見ると、顔の色も唇の色も真っ白で大変驚きました。

主人は、長い時間廊下で、何の説明もないまま待っていたのですが、後から出産した人たちが次々と出て来るのに、いつまでたっても私が出て来ないので、とても心配したと言っていました。主の守りによって、保育器の中で赤ちゃんは無事でした。

その後私は、処置室から大部屋に運ばれました。そこは、日本では考えられないほど時間に関係なく、お見舞いの人々の大声が絶えず飛び交う所でした。面会時間は守られておらず、絶えず大勢の人が出入りし、次から次へと大声で話して行きます。中国では、産後に身体を回復させるための漢方の食べ物を、差し入れる習慣があります。家族、親戚、友人たちがそれらを運んで来るのでした。

宣教団体アジア・アウトリーチのオフィスの現地スタッフは、産後の部屋はぜひ個室を取るよう勧めてくださったのですが、経済的な問題もあり、また宣教師なので現地の人々を理解するために大部屋を選んだのです。しかし、その場面に直面して、現地のスタッフの勧めの意味がようやく分かったのです。あまりに大声で騒がしいために、眠ることも身体を休めることもできませんでした。

そんな私の所に、香港でお世話になったお友だちの曹さんは、体調回復のチキンスープを作ってお見舞いに通ってくださいました。それは本当に大きな助けでした。(後に私は、曹さんからチキンスープの作り方を習い、今でもチキンスープを家族の健康のために役立てています。)

皆様のお祈りに支えられてこの試練を乗り越えることができましたが、今後も驚くことが起こって行きます。

グレイト・コミッションを読んで

いつもグレイトコミッションをお送りくださりあり



がとうございます。読ま
せていただく中で吉田先
生ご夫妻のお働きに励ま
されるとともに、先生方
を通して豊かに働かれる
主をほめたたえずにはお

られません。

「宣教は教会の窓」と言われますように、先生ご夫妻はいつもタイムリーに私たちの教会にお越しくださり、「窓」となってくださっています。これからもたくさん「窓」が開かれますようにお祈りさせていただきます。

主の祝福がゆたかにありますように！

JEC ピース・チャーチ岡山

牧師 中山聖一郎・はとみ

感謝とご報告

- 吉田恵利子師は、11月23日から12月5日まで大津・坂本のギャラリー楽心庵で第5回クリスマス個展を開催、その後12月10日から14日まで京都市の繁華街近くにある救世軍京都において初めてのクリスマス個展を開催いたしました。しかし、12月8日に体調がおかしくなり、救急病院で脳に関するMRI、CT、心電図などの検査と処置を受けました。その後も検査を受け、医師から安静に休養を取るよう指示をいただきました。現在は回復途上にあります。
- 吉田隆宣教師と恵利子宣教師は2025年1月に東マレーシア・ボルネオ島を訪問の計画を立てていましたが、12月にマレーシア側から、今回は十分な旅程が準備できないとお詫びの知らせが届きました。後になって、上記のように恵利子師の体調が優れませんでしたので主はご存じでマレーシア側からの申し出があったことに感謝を致しました。
- 本文で報告させていただきましたように、吉田隆宣教師は2月12日から18日までバングラデシュを訪問いたしました。
- 前号で2024年9月末日の時点で、グレイト・コミッショ

ンの会計残高がマイナス95,000円で経済的に非常に厳しい状況であることをお伝えさせていただきましたが皆様のご支援によりプラス165,935円で2025年を迎えることができましたことを感謝しご報告させていただきます。

祈りの課題 (以下の祈禱課題を覚えてお祈りいただければ幸いです。)

- 吉田隆師と恵利子師は、2015年から2018年にフランス・パリのプロテスタント日本語教会の牧会のために毎年3か月ずつ遣わされましたが、今年も4月23日から7月21日までの90日間、伝道と牧会の働きのため赴任することになりました。健康が守られて奉仕を全うすることができますように。
- バングラデシュに教会堂を6つ建設するための献金をお願いしました。その結果、10月末時点で593万円ほどが日本国内で捧げられました。一般的に海外送金が非常に難しくなり、試行錯誤の結果、海外送金を行うことができ、全額をバングラデシュに届けることができました。第二会堂の建設が既に始まりましたが、雨季に入る前に完成するようお祈りください。また、その他の4つの村にも会堂を建設するための献金が与えられるようお祈りください。(このためにお捧げくださる方は、振替用紙に「バングラデシュのため」とお書き添えください。)
- 吉田隆 & 恵利子宣教師の宣教30周年記念と結婚40周年を兼ねてイスラエル聖地旅行の計画が立てられています。しかし、更に円安のため旅行が難しく、現在のところ、延期されることになっております。戦争の早期完全終結、政情の安定と旅費の予算が満たされますように。(このためにお捧げくださる方は、振替用紙に「聖地旅行のため」とお書き添えください。)

チャレンジ！バングラデシュ会堂建設プロジェクト

バングラデシュに会堂を建設しよう

一つの会堂の建設費は300万円です。現地の教会の信徒は建設のために奉仕します。

教会・教団・個人でまとまったご献金(50万円以上)をいただいた場合、会堂玄関にお名前を刻んで現地の教会は名前を挙げてお祈りします。複数の方が集まって50万円をお捧げくださる場合は、チーム名と複数の個人名をお書きください。これは祈りによって神の国の相互関係を強めるプロジェクトです。

詳しい資料をご希望の方は、aojoffice@gmail.comまで、バングラデシュ会堂建設プロジェクトについてお問い合わせください。



会堂入り口に記された献金者のお名前